

# 佐賀天文

1982年 創刊号



佐賀天文協会

## も く じ

□ 佐賀天文協会の設立とその背景.....	古賀 利幸.....	1
□ ツアラトウストラはこう語る.....	椎島 富士夫.....	3
□ 星との出会い.....	松林 大樹.....	3
□ 星空への挑戦.....	立石 博.....	4
□ 星への興味.....	山下 正人.....	7
□ 夜空への誘い.....	松崎 猛.....	8
□ 星と科学.....	許山 秀樹.....	9
□ 佐天協会員名簿.....		11
□ 協会だより.....		14
□ 編集後記.....		14

表紙写真 所在地 鍋島町津留 鍋島天体観測所  
製作者 佐賀天文協会会長 古賀 利 幸  
25cm 西村製 反赤道, ライトシュミット 18.5cm 反射

## 佐賀天文協会の設立とその背景

会長 古賀利幸

協会を発足以来はや半年と云う歳月が流れました。設立総会以来その足跡を残す為に何かしなくてはならないと考えておりましたが、今度会員の皆様の協力により「佐賀天文」を発行できることは本会にとっても否、佐賀の天文学史上？すばらしい事ではないかと思われまます。現在わが佐賀県はとても文化的意味で後進県に属しております。特にその中でも天文学は最たるものではないでしょうか。この低迷した中であえて質素なものではありますが会誌を発行出来るのは何よりな事です。然しそれかと云ってわが県が天文学史的に見た時に全く不毛の地であったわけではありません。それはいくつかの証拠によって証明できます。それは武雄の鍋島家によって現在に至っている数個の天体望遠鏡と天球儀及び地球儀等であります。特に天体望遠鏡の中の一個は立派なもので、ガッチリした卓上三脚の上に取りつけられていて、オランダ製であります。幕末に輸入されたものです。又、天球儀には旧来の中国に伝わった星座ではなくヨーロッパの神話にもとづく絵がかきこまれています。

当時、武雄は佐賀だけではなく全国的意味からも先進した知識の本に天文学が行われていた事がうかがわれます。さらに古い天文学の機具は蓮池の中学に現存している分度之規矩がありこれは黄銅製の重いものであるが、それには古い伝統的な星座が円版上きれいに配列されている。(注裏面に天和3年(1668)とある)。多久邑には渾天儀が伝えられている(箱書きには天明8申八月改とある。)以上のように江戸時代よりチャンとした歴史があるのであります。時代が下って昭和に入ると東北大学の天文学教室の創設に深くかかわられた松隈先生は、佐賀の出身と云われております。その後、世界で最初にソ連の Sputnik が打ち上げられた頃、アメリカもそれに対抗するかの様に人工衛星の打ち上げが計画され、それを観測する為に日本にも観測網を広げるべく朝日新聞などの後援で佐賀にも観測班を作るようはたらきかけがあり、その件でその頃科学解説などで有名であった<sup>☆</sup>源田三夫先生が来佐されたのを機に現在の佐賀西高の前身である佐高の地学準備室を中心にして当時の地学の先生であった田口先生を会長にしてここに佐賀天文学同好会を創設したのでした。会員は8名位だったように思いますが、とにかく人工衛星などを早朝に起きて観測に行ったりしたものでした。この一連の観測で当時東京天文台長の宮地政司博士より感謝状をもらいました。又、会員の中には北海道に日食の観測に行った人もありましたが、やがて大学等を卒業して他の都市に職が決まったりしたので自然に解散せざるを得ませんでした。一方、その頃理科センターにおいて戦後はじめて日本光学で出来た20cmの屈折望遠鏡が古賀政己先生等によってスライド式のカマボコ型屋根の中に設置されました。然しこの望遠鏡は主に教員の研修を目的としたもので、一般の社会教育の目的を持っていないので一般の人々が簡単にみせてもらえなく、特別な許可がいるので通常は難しいとの事であったので、もっと自由に観測なり、観望なりが出来るもの考えたが、結局自分で観測所を持つのが一番簡単と思い、それと同性能でしかもコストが安くという事で数年の準備期間をへて25cm反赤を西村製作所に依頼し、ドームは専門メーカーに製作を依頼すると非常に高価になるので地元の鉄工所に大分いやがられたが色々話し合って3.6mの直径のものが出来、あの火星の大接近時に間にあった。5mm

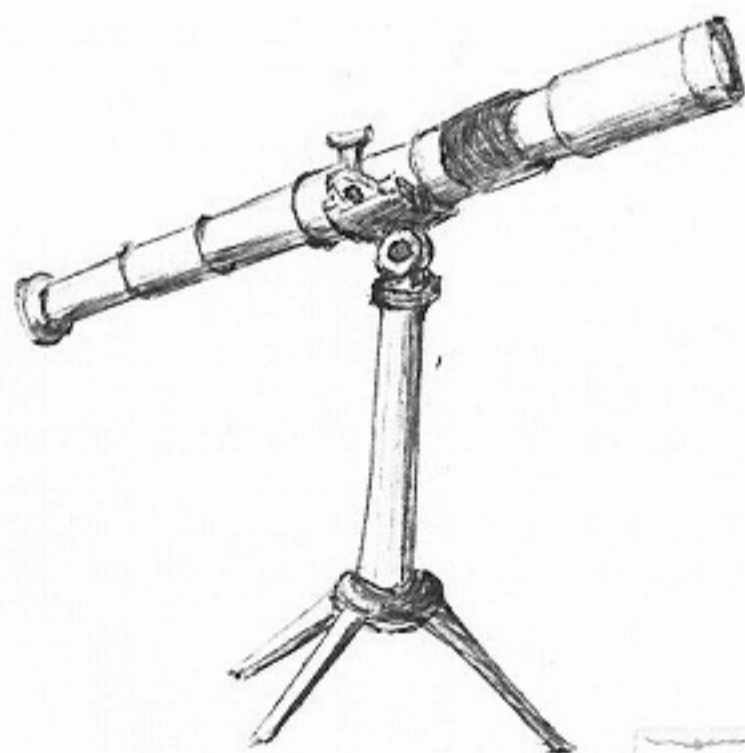
の接眼鏡を通しての火星は赤い電球を見るようであったが、それから毎夜少しずつ表面模様が変化していくのが、砂嵐が起るまで見られた。

その後、中原小学校に10cm屈折とドームが出来たり、一時天文の会合を有志により持ったこともあったが永く続かなかった。一方、鳥栖の方にも勝田敏幸君を中心に佐賀天文研究会が出来たとの事であるが、永く続かなかったとのことです。この様にして現在に至ったわけですが、何とかして佐賀にも県内の星の愛好者のすべてをあげての会を持つ事をかねて考えていたのですが、色々迷ってなかなか踏み切れずにいる時、福岡の山田義弘氏が来られて色々話しているうちに、天文協会設立に踏み切った訳です。現在、会員は県外会員まで含めて25名程度です。

また、他県に比べると本会の発展は今からと云えましょう。一方、会員が少いと云う事は互いがよく知りあえる長所もあります。最後に九州の各県に1台ないし2台位はプラネタリウムが普及しているのですが、佐賀には佐賀県理科教育センターにピンホール式の小型のものがあるだけで本格的なものはありません。色々同センターでも県に対して働きかけがあったようですが、予算が認められなかったようです。佐賀天文協会としても、誰でもが観測出来るような望遠鏡及び、プラネタリウム設置の運動を操り広げてゆこうではありませんか。

#### 原田三夫先生

科学解説家、東京大学理学部出身で「天文ガイド」の母体である「子供の科学」や「科学画報」誌などを創刊され、佐賀へも人工衛星の観測の件以外にもロータリークラブの招待で講演にいられており、当時としては科学解説の第一人者で、一般向けの著書として「子供の天文学」、「人工衛星」等数々あり、晩年は宇宙旅行協会を創設し、この方面にあまり関心を持たない人達への働きかけに努力され、現在の宇宙ブームの先ぶれ的な役割をつとめられながら、およそ10年近く前に他界された。



## ツアラトウストラはこう語る

副会長 椛 島 富士夫

人間達は、山麓まで光害をまきちらし、エネルギーの無駄使いを行ない、星の神々を、山へと追いたてた。

昭和30年、福岡天文学第2号会誌発行の頃は、久留米はおろか福岡市郊外でも天の川はきれいに  
見えておりました。当時、自分の望遠鏡を持つことは夢みたいなもので、せいぜい学校で3" (7.5  
cm)、4" (10cm) 反射でもあれば良い方だったと記憶しております。かような時代、月1度の例  
会は、楽しみで先輩の話しを聞き、帰りは30cmを望く、特に星野先生へは夜おそくまで、お世話  
いただき、ご迷惑を掛けた次第です。そののち学会解散となりブランクがあり、昭和35年7.6cm屈赤  
をようやく入手した。

ごたぶんにもれず、月写真から始めたが、この頃からすでに久留米では、星を見ることが困難な状  
態となり、昼間の金星へ移行し、20年近いブランクを迎えます。この間、何んにもしていなかった  
わけではなく、計算あるいは書物の天文となりました。一番にがてな球面三角法、原子物理をかじった  
のも幸いでした。そして、年何回かは山仲間での観望会を行なっていましたが人家一つない山中で空  
はなんとも言いようもありません。昼間でも4cmで、1等星はたやすく見えますし、夜は、ぎっしり  
詰まった星空の中で1.2等星の区別が付き難いほど輝き、ミルキーウェイそのままの天の川がみられ、  
ペルセウス二重星団は球状星団が近接した様で、しばし現世を忘れさせてくれます。また、かかる時、  
リヒアルト・ストラウスの「アルゾーシュプラーハ・ツアラトウストラ」でも聞けば、夜空の美しさを  
倍加しますし、なかなかおつなものです。

かような折、佐賀天文協会設立の話があり、参加した訳ですが、観測は山中で、会誌は永く続く  
よう思う次第です。

## 星との出会い

佐賀支部長 松 林 大 樹

私は、天文に興味をもってからまだ3年ぐらいで、天文についてはまだ何も知りません。こんな私  
が、佐賀支部長をどれだけ努めることができるかわかりませんが、自分なりに出来るだけ精一杯頑張  
ってみたいと思います。

また、この会報の創刊にあたり、支部長として何か書かなければなりません、これと言って書く  
こともありませんので、私の天文歴について書いてみたいと思います。

私が最初に天文に興味をもったのは、1979年の皆既月食のときです。それは、私が高校の2年  
生の時学校の天文部の部長と友人であった為、月食時の観測会に参加したのです。そこで初めて皆既

月食を見たのです。あの満月が、しだいに小さく細くなっていく時や、皆既中の月の赤銅色、そして再び大きくなっていく月の何とも言えないすばらしさは今でもはっきりと覚えています。やがて東の空が白くなりはじめ一夜を過ごした時のすばらしさを味わってから、私は天文のとりこになってしまったのです。その後受験勉強であまり星を見ることが出来ませんでした。しかし、気分転換によく星を見ていました。そして、ある時は勉強の時間より星を見る時間が多くなり、勉強をほとんどしなかったこともありました。それから今では、15cm反射鏡を買って暇さえあれば望遠鏡を覗いています。が、まだ完全に使いこなせていないので悪戦苦闘しています。また、今は仕事が忙しくて月に2.3回しか見れないのが現状です。しかし、どんなことがあっても星を見ることは続けていきたいと思っています。

最後に、佐賀天文協会の発展と県内に1人でも多くの天文ファンが増えることを祈りたいと思います。

## 星 空 へ の 挑 戦

鳥栖支部長 立 石 博

夕空の中、西空にひときわ輝く星が見えていることに気づかない人はいないでしょう。でも、その星がなんであるかということをはっきりとたしかめる人は、以外に少ないと思います。天文ファンならなおさらのこと、それがなんであるかということは一目瞭然です。

しかし、ほんとうにそれだけでいいのでしょうか。

今、目の前にある星空は、決して恒久的なものではありません。13世紀のプトレマイオスの天文学時代ならまだしも、今や太陽系外に人間の手が伸びようとするしているのです。これからは、積極的に宇宙への関心を深めていかななくてはなりません。

私達佐天協鳥栖支部は、この宇宙への探求心のもとに、それぞれの個性を生かしながら、星空という自然を感じとっていこうということで活動をやっていくつもりです。今まで数回、小さなものではありましたが支部会みたいなのもやりましたし、観望会みたいなのもやりましたが、それぞれ独自の宇宙のとらえ方というものがありまして、とても興味深いものであったと記憶しております。これからは、会員の数も増えることと思います。しかし、やはりその方々も独自の宇宙のとらえ方というものを持っておられるはずですので、それに添った方面で活動してもらいたいと思っています。

又、支部単位の活動ばかりでなく協会全体の活動に大いに参加し、より、協会の発展の方にも目を向けていきたいと思うのはもちろんのことです。

以上が今後の支部の方針とでもしておきましょう。

さて、堅苦しいプログラムみたいなものは、ここらあたりで終わりといたしまして、実際の支部の活動みたいなものや、私自身の天文歴めいたものでも書きましょう。

そう、たぶんあれは、8月29日～30日だったでしょうか、観望会をやるということになってい

ましたから、支部からはだいたいどのくらい参加するのかと思い、問合わせたところ、ほぼ4名だけだということになりました。それで、まあこのくらいの人数ならば、全部でいっしょにいったほうがよからうということで、中橋さんの車に便乗？（便乗というよりもむりやり乗せていってもらったというほうが正解でしょうか？）して、古賀天文台まで行ったわけです。

この日は朝からどうも雲行きがよくなくて、雨でも降るんではないかなんて心配していたんです。それで、車に乗っているときも、目はいつも車窓を通して頭の上のほうばかりに（後部座席は、ぐっと、後ろに頭をたれると、ちょうどガラスを通して空が見えるんですね、このとき初めて気がつきました。）いていました。三田川をすぎたあたりでしたか、急に雲がとれて、目の中にあの夏の星座はくちょう座がとびこんできたんです。おもわず口に出して“ああ、晴れとる”なんていいますと、全員（？）空の方に目をやり、“ああほんとや、よかった”なんて口々に言っていました。

そうこうしているうち、天文台について、車をおり空を見あげてみると、どうですか、今さっきまで見えていたあのはくちょう座の姿はどこにもありません。

全天雲に覆われて、星の光すら漏れてこないのです。このときばかりは全員がっかりしました。でもいちおう、天文台に上り、古賀さんが、いろいろと望遠鏡を向けておられましたけど、やはり雲の影響で25cmの威力を発揮することはできなかったようです。まあここあたりは、観望会に参加された方は知っておられると思いますので、簡単にすませまして、……。

この分では、だめであろうと観望をあきらめ、（10時ごろでしたか？）、又、車に便乗して帰ったわけです。でも、帰り道また、窓ごしに空を見あげていると、雲がとれ、はくちょう座を先頭に夏の星座が次々とその姿をあらわしはじめたではありませんか、もう、なんという皮肉でしょうか。天文台にいた1時間ばかりのわずかな時間だけ曇り、あとは晴れるなんて、（これは、だれかの普段の行いが悪いのじゃないかな？）

さあ、これからどうしよう。このまゝ帰るのはもったいない。

ついでだから、七曲峠を見に行ってみようか。こんな会話の中、すぐさま全員一致、車は急ぎ七曲峠に向けて走り始めました。私も七曲峠というのは行ったことがなかったので、とても楽しみでした。暗い山道を上りつめていくと、だんだんと星座が近くなっていくような気分で、峠についたときにはこんな星空がこんな近くにあったなんて、と思わずにはいられませんでした。でもすぐさま雲がおしよせて来て、星座を覆ってしまって、私達はもうがっかり、1時間ほどまったでしょうか。またすばらしい星空が私達の前に姿をあらわしたんです。

それからはもう天文ファンならではの、なごやかな会話の中、時間のたつのも忘れて星空観望です。このときばかりは、何もかも忘れてしまって、星の美しさをすなおに心に受けとめることができ、今でもそのときの様子がはっきりと心にうかんできます。

そうだ、あのとき、ベガスの四辺形の中の星の多さにはおどろかされました。私の数えたかぎりでは、20はゆうにあったと思います。今までにあんなに多くの星をその中にみとめたことはなかったので感心してしまいました。

午前2時もまわり、山はだをなでる風もすっかり冷えきって、体にちょっと寒さを感じて来たときでしょうか、最後にやぎ座のM30を見よう、それで帰ろう。という声ではっといつもの自分にかえ

り、さっそく視野の中にM30をとらえ、観望しましたが、なんとその姿の小さいこと、やっとそれが球状星団だってわかるくらいの大きさなんです。みんながそれを見終るころには、東の空には、すっかり昇りきったブレアデスが見えていました。それを横目に、私達は峠を下り始め、あとはいちもくさんに家までの道のりです。

こんな感じの、初めての支部の観望会でした。

もう、支部会の観望所はここにきまりです。まだここよりすばらしい所が見つかるまで、いや、ここ当分はそんなことはないでしょう。

来年になり、現在支部内にいる高校生が受験を終えたころには、支部全員でここにおしかけて、さわいでみるつもりです。ぜひ一度他の支部の方々も見に来て下さい。

最後にちょっと私の天文歴めいたものでも紹介してみます。

私が星空に興味をもったのは、中1のときでしたか、昼間金星が見えるということで、理科の先生が望遠鏡を外に出しておられまして、それをだまっていたのぞかせてもらったときからだと思います。あのときは、その方面はまったくとっていいほど、知らなかったし、反射望遠鏡はどこからのぞくのかということ真剣に考えるようなそんな感じでしたから、今考えてみると、お笑いものです。あのとき、反射望遠鏡を下の方からのぞいていると、ふと、わきのほうに光る星があって、友達に「わ、星が……、肉眼で見える」なんてさわいでいましたけど、友達は1人として、その星を見ることはできなかつたんです。それで、「うそつくな、昼間星が見えるわけないやろが」なんてばかにされたことを記憶しています。今なら「おまえたち、なんも知らんな〜」なんて言ってやれますけど、そのときは、それでなにも言えませんでした。

それから、なにもなく、星への興味も忘れかけていましたけど、高校へ入り、友達に星好きのやつができて、こんどは本格的に、星の世界へとはいっていったわけです。そのとき、望遠鏡もついでに買っていろいろと星空へそれを向けていました。そうそう、この望遠鏡で初めてのぞいた天体はM1だったんです。何も知らずただうれしくて、望遠鏡を外に出し、そのままアイピースをのぞきこむと、中央になにやら、かすんだ雲みたいなものが見えていたんですね、あとで調べてみると、それはM1だったんです。星図も持たずただ見たものがM1だったとは、偶然というほかありません。

まあそれから、どういうわけか星を見るよりも星の本を読んだり、いろいろ作ったりする方がよくて、今でもそんなことばかりやっております。今まで読んだ本の中では、やっぱりあの藤井さんの「星の旅」がいちばんよかったと思っています。現在読んでる本は「天文学史の試み」って本です。またこんど機会があれば、この本についても書いてみたいと思っています。それから、天文台も一度設計して建ててみたいと思っています。

だいぶ長くなってしまいました。書きだすと、終わりの文章が見つからなくて、ついつい長いものとなってしまいます。まとまりのない文章で読みづらかったこととありますが、最初の会報の原稿ということで、始めて書いたものですからその点はお許し下さい。

それから、支部内の方々に、近いうちにまた観望会を開きたいと思っておりますので参加して下さい。



## 星への興味

唐津支部長 山下正人

僕が星に興味をもったきっかけは母が作ってくれた。

ガキの頃、夜、母につれられて 500m はなれた母の実家まで歩いてゆくのだが、その途中で、母が「ほら、あそこから、その山ノところまで白か雲あるごてしとろうが、あれが天の川よ」とか「あそこに7つひしゃくごてしとる星があろうが、あれがうわさの北斗七星よ」とか乏しい知識をせいいっぱいふりしぼって教えてくれたことからであった。それから僕は、晴れると「うはーきれいかあ」とおたけびしつつ星をながめていたが、もっと星のことが知りたくなったので、母にせがむと、今度はカシオペアをおしえてくれたが、母の教えたそれは天頂付近にあり、今考えるとあれは明るい星を適当にW字に結んだだけだったと思われる。母は、けしからんことに、それ以上星の知識がなかったもので、しばらくはその三つをたどることでガマンしていた。

幼稚園の頃、インテリであった僕は「アポロ宇宙船月へ行く」という本を読み感銘をうけ、鉄腕アトムと宇宙旅行する夢などみたものだが、そのうち望遠鏡が欲しくなり、家の者にせがんだ所、夢もロマンもない湯いた奴らに星がわかるわけがなく、きゃつらは「星みて何になるか」と例のお決まりのセリフを冷たくはきすて、僕を「なしこやんか子のできたかね」とでも言いたげな目でかなり強烈な冷たい流し目光線をあびせるのであった。

小四の頃、となりの魚屋のにいちゃんに学習望遠鏡で月をみせてもらったが、もうその時の感動、今でもはっきり思い出すことが出来るくらい強烈であった。もういよいよその望遠鏡が欲しくなり、その魚屋で一ヶ月学校から帰って手伝いをしてやっと手に入れたときは悩みそがひっくり返るくらいうれしかった。その念願の望遠鏡は口径4cmアクロマート架台なしというすばらしくシンプルなものであったがこれで色々みた。金星のみちかけ、土星の環、木星のしま。しかし星雲はダメであった。4cmでみたM42、M31など、天体写真をみなれていた僕にはガククリ来た。そして、ムラムラと大口径がほしくなり、ノドから手が出るというより鼻から足がでそうであった。その年、お年玉を集めて買った8cmシングルレンズノ口径と値段に感わされたのがいけなかった。さっそく作ってみたのだが、みかけはもう堂々たるもので、架台も作り、りっぱなものであった。しかしこれで星をみると何かすごくきれいではあるけれど、シリウスなどは7色に光り十字クロスをえがいて絵の様にきれいであった。これで土星をみても輪が十字なのである。新発見、土星にはたてにも輪があった、等と最初はおもしろがってアホなことをつぶやいていたが、そのうちさすがにあきて来て、まともな望遠鏡が欲しくなった。そして10cmの反赤を作ろうとした。中1の時である。

「反射望遠鏡の作り方」という本を買って来てみた。赤道儀を作ろうとサイの発情期のごとくがんばったが、あえなく断念……。経緯台の設計図にかかった。これはできそうな感じであった。単純そのものの僕は「要するにフォークと三脚作って、回るようにつなげばええんでないかい」と思い、何と三日計画をたてた。しかし、仮に10cmの反経が3日で出来るわけもなく、三脚のボルト穴はがすのに、ボルトをバーナーでまっかに焼いてペンチでたたっこむというすさまじいやり方をとったので、これだけにすでに一週間を要してしまった。結局1ヶ月かかったが、さすがに苦勞した愛機はかわいく出来た。その日は抱いてねた。

これで、M<sub>31</sub>天体はもちろんNGC天体の明るい奴まで入れるとかなりの数を見たと思う。これでまた調子によって鏡面みがきをやろうと思う様になった。そして、12.5cm鏡を購入、2週間ぐらいで順調に砂ズリを終わり、あとピッチのみを残していたが、このピッチ盤作りがうまくゆかない。うまくゆかないまま現在に至っているという次第です。その後、またこりずに10cm鏡をはずし、その鏡面をアルミで作った鏡筒におさめ写真鏡にしようともくろんでやはり失敗……。失敗は成功のもとというが、果たして僕の計画、成功するのはいつの日か。このままではいかんと思っている。

## 夜空への誘い

唐津支部 松崎 猛

僕が星に興味を持ち始めた切っ掛けは、少し変っていて、8年ほど前にせっけんが目に入り、視力が0.3位まで低下してしまい、目を良くする為に遠くを見たり、近くを見たりしていました。

その頃から星を見初めました。その時は佐賀の玄海町に住んでいたもので、星はよく輝き美しかったけれども、その頃、僕が星に対して、“これ位、星が見えるのはあたりまえ”という気持ちしかなかったのです。

僕が、小学5年の頃、大阪に引越して大阪の大都会で見る星におどろきました。3等星以下の星は見えなかったし、夏は光化学スモッグに空はおかされていました。その頃佐賀の田舎町で見た、にぎやかなほど、手にとどきそうな輝きを見せた、星の美しさに気づき、心から星に興味を持ち初めました。

最初に望遠鏡を手にしたのが、月の凹凸、それから惑星でした。自分なりに感激しました。それから星雲、星団に挑戦したのですが、大阪の空の下では、まだ、星に興味を持って間もない経験不足の僕には無理でした。

本を買って見ると、初心者にもわかりやすく星雲、星団の導入が書かれてあった。しかし、すべての導入の仕方は、星から星へたどったり、「ある星から北西へ約3°の所」とか、書かれてあったけど、大阪の光害だらけの街の下からは、星雲、星団を導く星々、その星が見えないのですから、経験不足の僕にはひと苦勞でした。

それでも一生懸命、苦勞に苦勞を重ねて、かくれていた星雲、星団を目にしたのが、M42、M31 M13です。なんともいえぬ感激が胸を……。決して写真で見る様に壮大に見えなかったけれども、さがしえた事に感激したのでしょうか。

最初に見た星団など、星雲か、星団かわからないほどでしたし、星雲などは“もや”みたいなものが、見えたり、見えなかったりでした。

そして、大阪で色々あったけど、再び佐賀の方に移り、初めに住た時と、ちがった感じで、星を見ていたら、その時、初めて「天の川」というものに気づき、最初は薄雲と思ったほどで、友達から笑われましたけれど、仕方ないことです。大阪では神に祈っても「天の川」という姿は見せてくれませんでしたから。

初めて天の川を見た時は、それは感激して、啞然としてただ見つめるだけでした。

そのような経過をたどりましたが、星に興味を持ち初めて5年位です。まだまだ何も知らないけれど、今からも、より一層、がんばっていきたいと思っております。

## 星 と 科 学

鳥栖支部 許山 秀樹

最近、先人と現代人とは星を見る目が本質的に異なっているのではないかという思いが著しくなった。現代に至り、科学が隆盛を極めると、現代人は思考、現動の基盤を科学に求めはじめた。そして我々も善きにつけ悪きにつけ、自然を科学的に見るようになってしまった。だが科学は根拠のないものは排斥するというその性格上、我々から哲学することを奮う。先人とは星を見る目が異なるのは、その結果、我々が星を感覚的に見なくなってしまうからであろう。これは現代人が、さめていてあまり感動しなくなったことと無縁ではあるまい。しかし先人たちはそうではなかった。アルクトゥルスを日本では麦星とよんでいた話を引き合いに出すまでもなく、彼らは自然をあるがままにとらえていたし、彼らの生活の中に自然があった。我々が色々な「事実」をもとに自然を見ているとすれば、先人は、それに左右されることなく自由に自然の中に入っていったはずである。即ち、先人は、全体的な直感にのみ根拠をおいて、自由な発想をしたはずである。我々は科学という望遠鏡を得て星を見ている。先人は直視という望遠鏡で星を見つめた。その望遠鏡では何が見えたのか。人間にとって、どちらが幸福なのだろうか。抽象的に見えて、意外に我々の生活に関わる問題である。

その答を得る手がかりとして一編の詩をあげよう。20年ぶりに会った衛八処士という貧しい友人に杜甫が贈ったものだ。

人生では逢えないともなると

参と商の二つの星のように逢えないものなのに

今晚はこれは何という いい夜だろう

あなたといっしょにこのろうそくの光のもとにいる。

中 略

あなたは子供さんたちに酒やのみものを並べさせ

夜の雨の中を春のにらを切って来たり わざわざよい栗をまぜて御飯をたいてくれ

た 主人のあなたは、お互いに逢うことのむずかしさを言って

一気に十杯の盃をやりとりした。十杯の盃を重ねても 私は

酔うことが出来ない あなたの昔ながらの友情

がありがたくてならないし

明日になれば お互いに山々をへだて そのくらしも運命も

どうなることやらわからないのだから

二行目の表現に注意をしたい。言うまでもなく参とはベテルギューズ、商とはアンタレスであるが、ここで気が付くべきは、東洋と西洋の先人たちが、我々の科学に触まれた哲学では考えられないことをきせずして思いついたことである。そしてその二星がそろってベテルギューズにしてもシリウスの方がずっとあかるくて注意をひくし、オリオン座の我々の興味は、その中にあるガス星雲にほとんど注がれてベテルギューズにはあまり関心がないように思う。アンタレスにもそのような理由はあるはずである。また同時に見られない星はもっとほかにありそうに思う。それなのになぜ東西の先人たちは、ベテルギューズとアンタレスを有機的にとらえたのだろうか。この二星のとらえ方が一致した理由が必ずあるはずだ。精いっぱい彼らの心に戻って考えると、思うに空の暗さもさることながら何事にも害されない純粋な心で空を見上げていたからではなかろうか。あるいは想像力で物事を多義的にとらえる心で。青白い星ばかりが見える星空の中でぶきみな赤をもって見える二つの星。たとえば春、オリオンが沈み、夜の帳がおりると東にはぶきみなアンタレスがのぼっている。二つの赤い星が、宇宙の表と裏を常に支配しているという概念……。こういう彼らの洞察力によってこういう故事が生まれたのだろう。

科学を知らない彼らは、そのかわり驚く程鋭い想像力、直視力をもっていたとはっきり断言できる。

さて、ようやく結論を出すに致ったと思う科学は多くの点で人類を幸福にしたけれども科学を得て人類が失なったものも数多い。先人のもっていた想像力、直視力もそのひとつだ。それは心の羽と呼べるかもしれない。心の羽を失って現代人は自由に空を飛べなくなった。豊かな想像が出来なくなったのである。生活から想像がなくなれば、物事を一義的にしかとらえることができないから周りのもののつやがなくなる。ここまできると、もはや人間らしい生活とはいえないだろう。この点では現代人は先人より不幸になっているのである。徒に「事実」を追い、「事実」でないものを否定した今日の科学の弊害がここにある。無論、想像力が万能科学は必要ないとはいわない。ガリレオの悲劇を考える時、その思いは一層深まる。だが、科学によって人間らしさを失う以上、その一方的な享受はあやまりである。科学や想像力で物事の上に立つのではなく、そのふたつを謙虚に受け入れて物事を学ぶ態度、これが必要なのである。ガリレオの宗教裁判でも、上に立とうとした方が間違っていた。謙虚な姿勢があれば、科学と想像は反しない。まして我々は事実を探究する団体ではない。もっと謙虚に星を見つめ、もっと大胆に物事を多義的にとらえるべきではなかろうか。人間らしさを失った我々の心に、先人の豊かな心を取り戻す方法は、それしかない。

こういう話がある。物理学者のおじいさんに孫が「枝が動くから風が吹くんだよね」というと、おじいさんは、「はっ」としたそうである。この話は作り話だ、ということだが、意外に深い含意がある。

# 佐賀天文協会 会 員 名 簿

昭和57年5月現在

顧問	山田 義弘	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
会長	古賀 利幸	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
副会長	椎島 富士夫	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
会計監査	梶原 守	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
理事	古賀 康嗣	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
"	立石 博	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
"	古川 聡	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
"	広川 秋仁	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校

## ( 鳥 栖 支 部 )

支部長	立石 博	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	松尾 伊知郎	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	吉松 則文	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	篠原 雅尚	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	許山 秀樹	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	田中 勝	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	中橋 徹	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校
	椎島 富士夫	(佐賀県佐賀市)	佐賀県立佐賀高等学校	佐賀県立佐賀高等学校

(佐賀支部)

支部長 松林 大樹  
野田 寿一  
江口 久幸  
古賀 利幸  
古賀 康嗣  
福島 貞幸  
川瀬 義弘  
園田 正樹  
末松 広子  
池田 修

(多久支部)

支部長 広川 秋仁  
北島 雅彦  
古賀 一成  
佐々木 努

(武雄支部)

古川 聡  
松尾 浩  
野田 尚之  
梶原 守

( 唐 津 支 部 )

支部長	山下 正人	...	...	...	...
	松崎 猛	...	...	...	...
	吉田 忠	...	...	...	...
県外会員	山田 義弘	...	...	...	...
	下川 洋司	...	...	...	...
	山田 貢	...	...	...	...
	池田 徳幸	...	...	...	...

師)

年)

会 計 野田 寿一 [redacted] [redacted] [redacted] [redacted] [redacted] [redacted]

企画 園田 正樹 [redacted] [redacted] [redacted] [redacted] [redacted] [redacted]



## 協会だより

### ● 1982年佐賀天文協会年間計画

January	月食観測会
February	星座観望会(天文教室の為の勉強会)
March	黄道光(西天)観望 or 惑星
April	火星北半球観測会, 業認少年団天文教室
May	熊本県民天文台発会式参加, みずがめ座流星の水星観測
June	博物館視察
July	福富町, 小城町隕石落化地調査, アストロプラザ大分大会参加
August	夏の星座観望会(初心者向け)
September	月面スケッチ観測会(2回)
October	銀河観望会(天文台使用)
November	秋の星座観望会(初心者向け)
December	月食観測会

### 目 標

1. 佐賀にプラネタリウムを造る
2. 天文台(天文協会附属)を建設する

### 編 集 後 記

やっと、会誌を発刊するはこびになりました。

最初どのようにやればよいのか、四苦八苦でしたが、いろんな人の協力によって完成させることが出来ました。

今後とも、2号、3号と会誌を発刊していきたいと思っておりますので、観測データ、自分の愛機のこと等何んでも結構ですので事務局の方まで送ってください。

最後に、会誌が遅れてしまって申し訳ありませんでした。今後も頑張っていくしますので御協力をお願いします。

— 編集局 梶原 —